

小さくても大切

二年 上原彩江

犬、という言葉聞いたとき、あの可愛いらしく人懐っこい姿を思い浮かべる人は少なくないと思います。私が初めて犬を飼ったとき、今までしらなかった残酷すぎる別の姿を知ることになりました。五年ほど前、我が家に一匹の犬を迎え入れることが決まりました。動物が好きで、ずっと「犬が飼いたい」と強く思っていたので、私にとって、とても嬉しい出来事でした。そのときに、初めて意味を覚える言葉がありました。それは、「保護犬」や、「多頭飼育崩壊」というような言葉です。その頃は、「犬を飼うならペットショップ」というイメージしか私は持っていなかったもので、そこで初めて保護犬に興味を持ちました。

多頭飼育崩壊とは、最初は自宅など一か所で、自分がお世話をできる適正な頭数を飼っていたが、予想を超えてたくさん頭数になってしまい、経済的にも体力的にも苦しくなって、ペットたちの飼育に手が回らなくなってしまいうことをいいます。このようなことは不妊手術などをしていなくて異常に繁殖してしまったり、一生お世話をするという覚悟を持たずに飼ってしまったりするのが原因で起ります。衛生面も非常に悪いため、近隣とトラブルになることも悪く、殺処分にもつながります。多頭

飼育崩壊によって、何の罪もない命が失われてしまうことがあるのです。

私の飼う犬は、長崎県が多頭飼育崩壊からボランティア団体の方々に保護され、我が家にやって来ました。そのときに、長崎県の民家にいた頃の写真を家族に頼んで見せてもらいましたが、それは、悲しすぎる現実の光景でした。家に来たときが生まれて八か月だったので、それまではずっとあの中で生きていたなんて考えると、一緒に生きて助けてもらうことができなかつた子もいたのだらうなと思います。

迎え入れてからは楽しい毎日を送っていますが、初めて来た日は一緒にいた犬につけられたであろう傷があったし、ごはんを食べるときも、ものすごい速さで食べ終わり、私たち人間のものでも、あるものでも食べようとしてしまうことが今でもあり、そういう生活をしないと生きて来れなかつたのだと思います。飼われていたのが高齢者だったので、お年寄りを見ると怖くて震えながらほえてしまい、そのたびに前のことを思い出しているのかと思うと私たちも心が痛くなります。

確かに、犬は飼っていてとても可愛くていやされるし、それが魅力だと思えます。ですが、それだけではありません。最近はテレビでも保護犬が取り上げられることが増えたとし、小さくても同じように大切な命を守るため、まずはたくさんの人にこのようなことを知ってもらいたいです。